

口永良部島の火山活動解説資料（平成 22 年 12 月）

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。ただし、火口内では引き続き噴気がみられており、火山灰等の噴出する可能性があります。また、火口付近では火山ガスに対する注意が必要です。

平成 21 年 10 月 30 日に噴火予報（噴火警戒レベル 1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

○ 12 月の活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図 1、図 4、図 5）

新岳の噴煙活動は低調で、白色の噴煙が火口縁上概ね 100m（最高高度は 300m）で経過しました。

14 日に海上自衛隊第 72 航空隊鹿屋航空分遣隊の協力を得て実施した上空からの観測では、2009 年 12 月 22 日の観測と比べて、新岳火口及びその周辺の状況や地表面温度分布に大きな変化はなく、新岳火口から白色の噴煙が上がっているのを確認しました。

・地震や微動の発生状況（図 1）

火山性地震は少ない状態で経過しました。月回数は 50 回（11 月：18 回）でした。今期間、震源決定された火山性地震はありませんでした。

火山性微動の月回数は 46 回（11 月：18 回）で、前期間と比べてやや増加しました。

・地殻変動の状況（図 1、図 2）

GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 23 年 1 月分）は平成 23 年 2 月 8 日に発表する予定です。

※この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学及び独立行政法人産業技術総合研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 20 業使、第 385 号）。

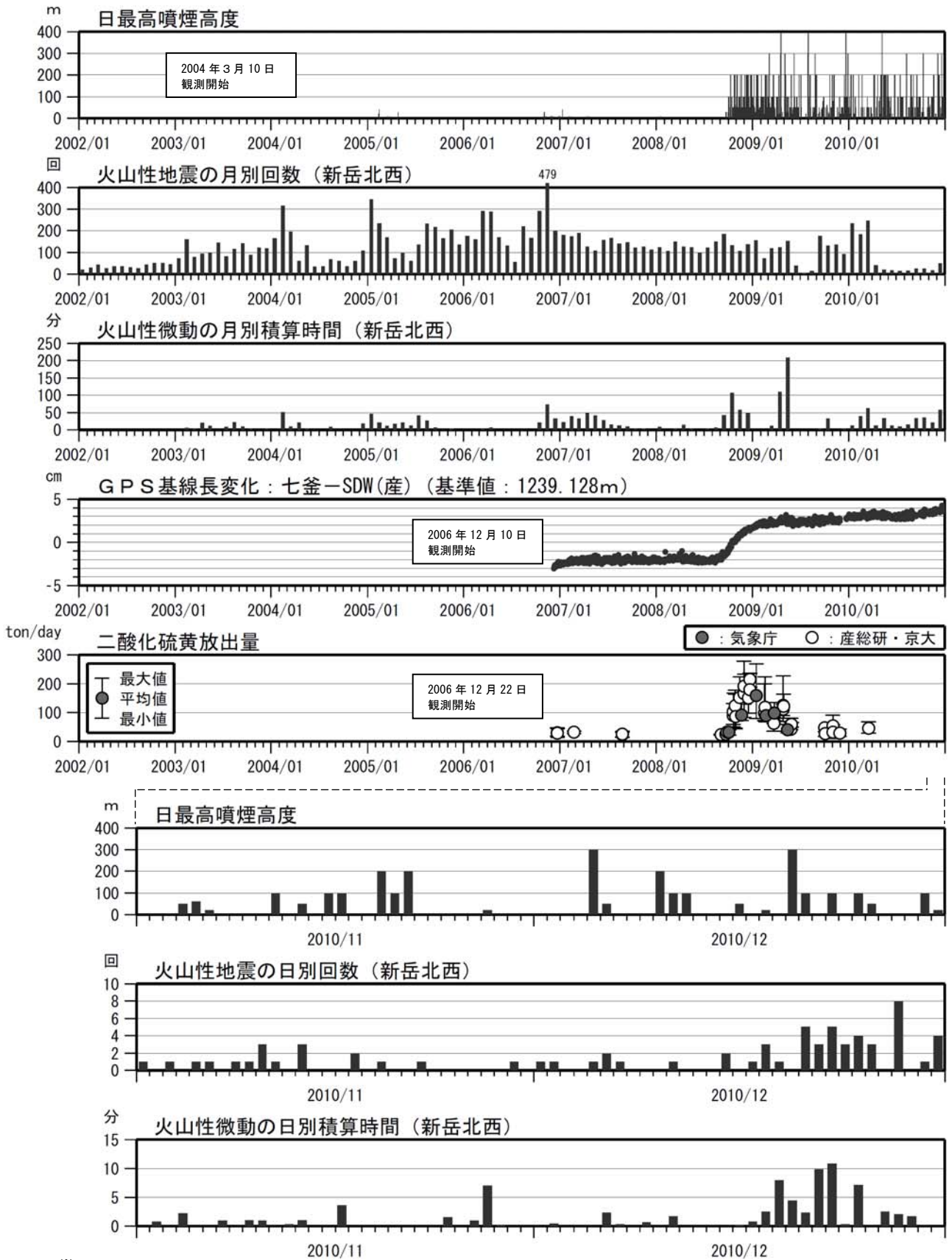


図 1※ 口永良部島 火山活動経過図（2002 年 1 月～2010 年 12 月）

<12 月の状況>

- ・噴煙活動は低調で、噴煙の高さは火口縁上概ね 100m（最高高度は 300m）で経過しました。
- ・火山性地震は少ない状態で経過しました。月回数は 50 回（11 月：18 回）でした。
- ・火山性微動の月回数は 46 回（11 月：18 回）で、前期間と比べてやや増加しました。

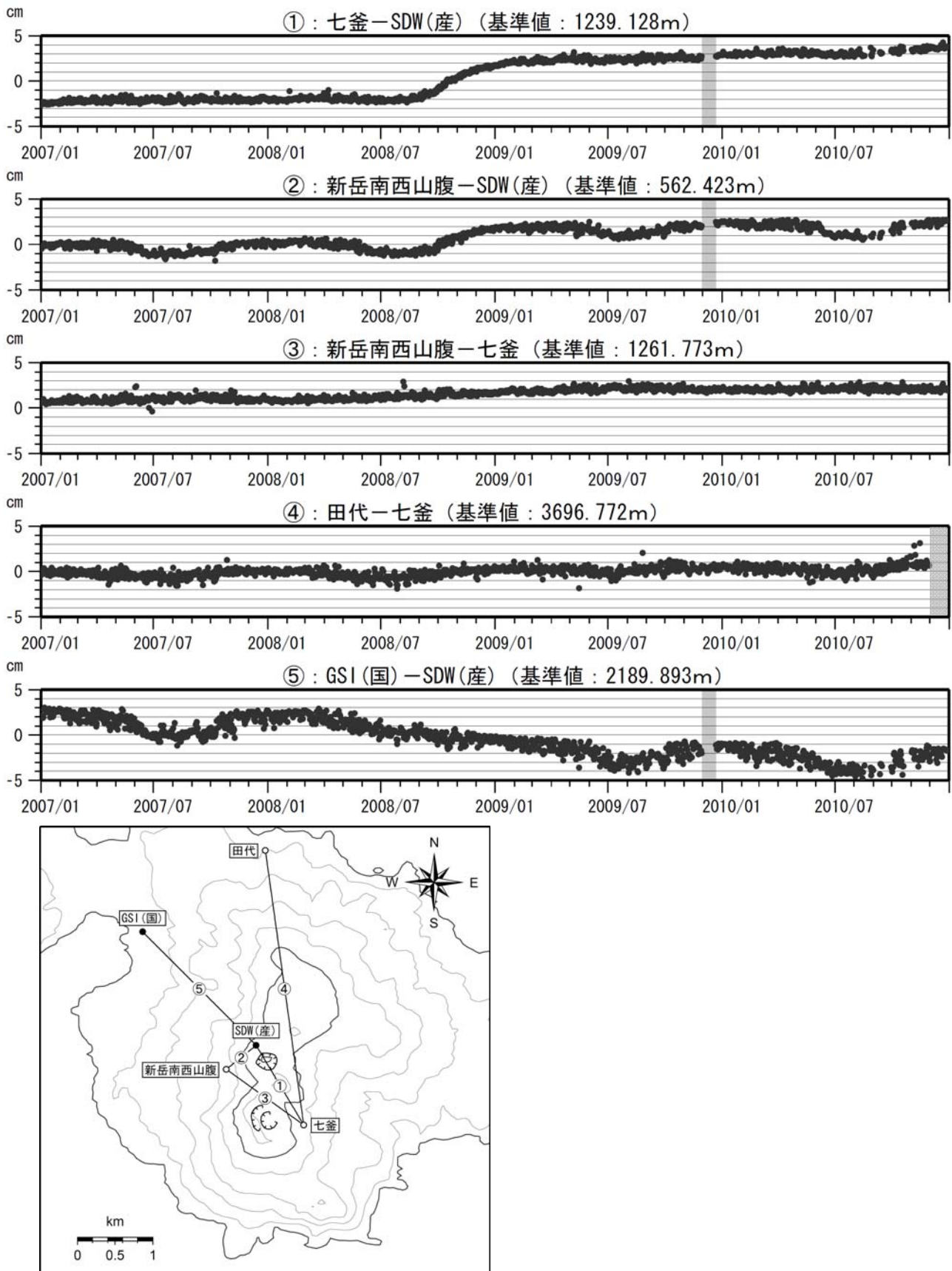


図 2※ 口永良部島 GPS 連続観測による基線長変化 (2007 年 1 月～2010 年 12 月)

GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

小さな白丸は気象庁、小さな黒丸は他機関の観測点位置を示しています。

灰色部分は観測点障害のため欠測。

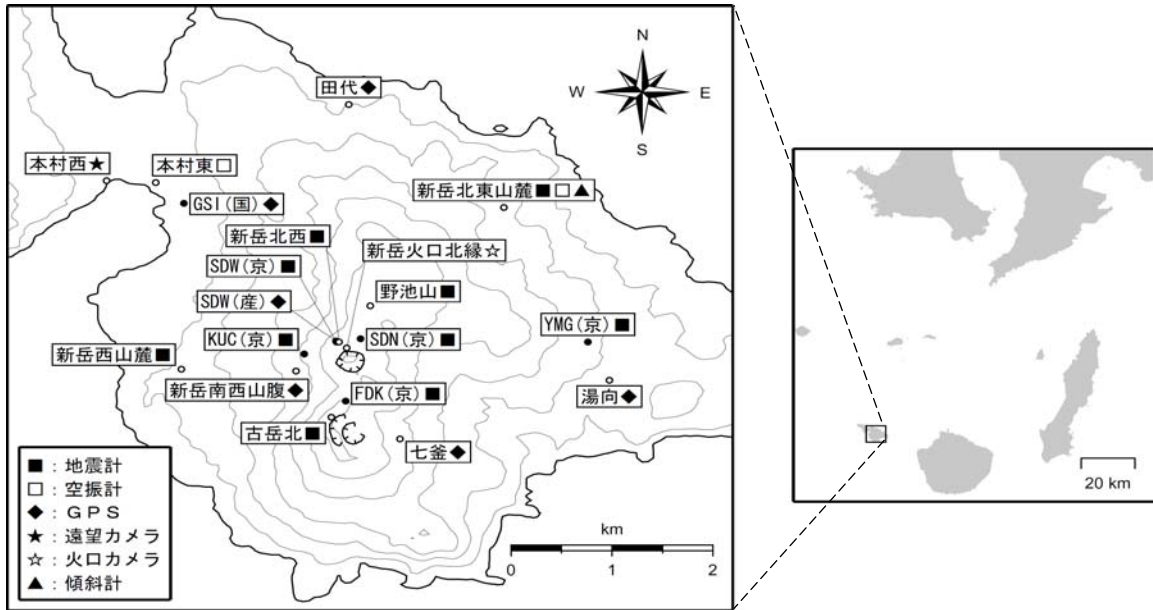


図 3 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸は気象庁、小さな黒丸は他機関の観測点位置を示しています。

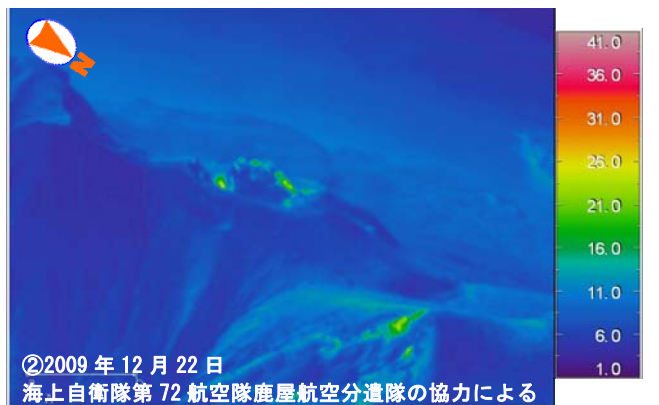
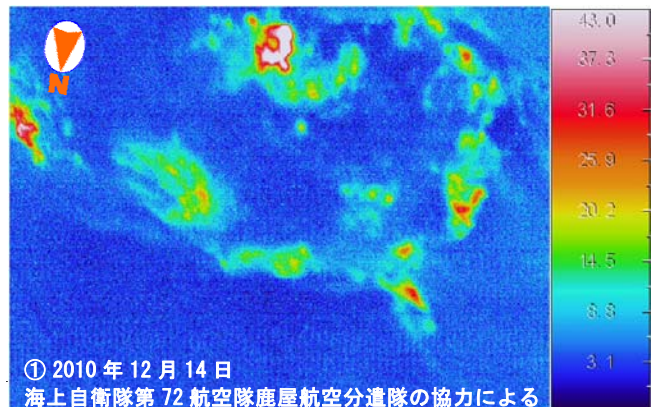


図 4 口永良部島 赤外熱映像装置¹⁾による新岳火口の地表面温度分布
(上段：2010 年 12 月 14 日、下段：2009 年 12 月 22 日)

主に新岳南側火口壁で白色の噴煙が見られました。その他火口内で弱い噴煙が見られました。噴煙の高さは火口縁上 100m でした。

赤外熱映像の温度表示は熱異常域ではない領域の平均温度で調整して表示しています。

1) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感じて温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源よりも低く測定される場合があります。





図5 口永良部島 新岳火口の南側火口壁の状況

噴煙の量に大きな変化は認められませんでした。今年9月に確認された火口内南側噴気地帯の噴気孔がはっきりと視認でき、勢いよく噴気を噴出していました。

